



馬を体調万全なまま運ぶ ― 輸送とコンディショニング ―

競技会参加や競馬の出走には輸送がつきもの、短時間から長時間、トラックから飛行機まで馬はさまざまな輸送方法によって慣れた飼育環境から見知らぬ競技会場や競馬場へ運ばれていきます。輸送先で持てる能力を発揮できるようコンディションを崩さずに輸送するには飼養管理面での注意も必要です。ここでは、輸送熱や疝痛の発症リスクが高まる長時間にわたる陸路輸送に焦点を絞って紹介いたします。

・輸送が与えるストレス

閉鎖空間での不自由さによる精神的ストレスのほか、振動や騒音、不十分な換気に加え排気ガスや糞尿由来アンモニアによる呼吸環境の悪化など輸送が馬に与えるストレスはさまざまです。また、馬運車内での姿勢維持は馬房内とは異なり、バランスを絶えず保つために筋肉を活動させており、これには常歩と同程度のエネルギー消費を伴うとのこと、それが長時間になれば一定以上の筋肉疲労にもつながります。こうしたストレスの蓄積は、輸送性の肺炎や疝痛の発症リスクを高めると考えられています。輸送に慣れていない馬や神経質な馬では、そのリスクはさらに高まります。

・輸送中の給水と飼料給与

輸送中、自由に水や飼料を摂取できないことも少なからずストレスとなることが指摘されています。馬の陸路輸送に関するさまざまなガイドラインには、4時間おきに停車して飲水させる、停車時間は少なくとも20分程度とる、4〜6時間を超える輸送の場合は輸送中に飼料を与える（多くの場合は乾草で可）、1日の輸送時間は12時間を超えないようにし輸送の合間には8時間程度馬房内で休息させる、などが示されています。

飲水の重要性はしばしば見過ごされるようですが、脱水は疝痛リスクを高めるだけでなく、到着後のパフォーマンスにも影響を与えるとされています。とくに高温多湿環境下では発汗量も多く、頻繁な給水が奨められます。飲水があまり進まない馬には、普段飲み慣れている水を積み込み与えることも重要です。

・呼吸ゾーンはダストフリーに

馬運車内では乾草ネットなどを吊るし、常時乾草を少しずつ食べられるようにするのが一般的です。しかし、乾草は埃っぽく低質のものはカビが発生しているものもあるかもしれません。このような乾草を馬の鼻づら、すなわち呼吸ゾーンに吊るすのは輸送性の呼吸器疾患の発症原因となります。これを予防するため、乾草ネットは馬が食べられる範囲でなるべく低く吊るす必要があります（写真）。

さらに、馬運車に持ち込む前にネットごと十分水に浸して塵埃を取り除いておくことが奨められます。

サイレージ（水分含有率がサイレージよりも低いヘイレージを含む）や青草（生草）は水分含量が乾草よりも高く、埃っぽくないので輸送時の給与には向いています。ただし、輸送時にだけ給与するのではなく、輸送前2週間程度の時間をかけて同じものを食べ慣れさせておくことが消化管のトラブル防止には重要です。

また、栄養や飼養管理とは直接関係しませんが、上述のガイドラインによく記述されているのは、輸送中の馬の頭部を自由にしてやるということです。馬は頭頸部を自由に動かすことで肺の浄化作用を促し、これによって細菌感染や輸送性疾患から防御しているからです。

・食べられたエサの効果

2008年11月、23歳のオグリキャップを公開展示するため、北海道新冠から東京競馬場に輸送したときのことがい起こされます。同馬の主治医を含む獣医師2名帯同のうえ、函館競馬場での1泊をはさむ旅程など万全の態勢で輸送したにもかかわらず、東京競馬場に到着したときオグリキャップは軽い便秘症を発症していました。3日後にせまった展示が危ぶまれるなか、主治医の指示で直ちに青草を手配し食べさせたところ、それまで食欲がなかったオグリキャップは喜んで青草を食べ、腸の動きも復活し便秘症は改善されたのでした。その後同馬の展示イベントは無事に成功、多くの競馬ファンの目にその雄姿を焼き付け、往路の経験を活かして新冠への帰路につきました。水分を含む好みのエサがもたらす効果と高齢馬に対する輸送時の気遣いの重要性をオグリキャップは教えてくれました。



輸送時の乾草は、馬の呼吸ゾーンを避けてなるべく低く吊るす
(Transporting Horses by Road and Air : UC Davis Veterinary Medicine 2013より転載)